「シンポジウム」日本文学 7

# 近松

出席者
松崎仁〈司会〉
広末保　原道生
土田衛
信多純一
諏訪春雄

涙川。恋の氷にとぢられて。
身を切りくだく思ひより
憂き川竹のうきふしを。
せめて閨(ねや)もる月だにも。
あはれ枕に問ひも来ず。
我ひとり寝となりたるぞや。
心づくしの年月は。
幾百夜(いくもちよ)をか泣きあかし。しのぎあかすも
この身一つの報いの罪や。数々の。
岩もる水のわきかへり。
胸にみなぎる。恋慕の熱湯——『用明天皇職人鑑』より

学生社

## 出席者略歴

まつざき・ひとし＝一九二三年生まる。東京大学卒業。現在立教大学教授。主要著書・論文は『歌舞伎脚本集（上下）』（共著・八日本古典文学大系）岩波書店）「宝永三年の近松」（文学、昭40・1）「大経師昔暦の再吟味」（国語と国文学、昭47・7）など。

ひろすえ・たもつ＝一九一九年生まる。東京大学卒業。現在法政大学教授。主要著書は『もう一つの日本美』（美術出版社）『辺界の悪所』（平凡社）『近松序説』（未来社）『遊行・悪場所』（未来社）など。

はら・みちお＝一九三六年生まる。東京大学大学院修了。現在横浜市立大学助教授。主要論文は「『大職冠』ノート――近松以前――」（近松論集、第六集）「『やつし』の浄瑠璃化――煙草売り源七の明と暗――」（文学、昭50・6）など。

つちだ・まもる＝一九二六年生まる。京都大学卒業。現在大阪女子大学教授。主要著書は『名女情比』『かなめいし』『景清』（愛媛大学古典叢刊刊行会）『評釈嵐無常物語』（共著・青葉図書）『校註仮名手本忠臣蔵』（共著・笠間書院）など。

しのだ・じゅんいち＝一九三一年生まる。京都大学大学院修了。現在大阪大学助教授。主要著書・論文は『のろまそろま狂言集成』（大学堂）「宇治加賀掾年譜」（『加賀掾段物集』古典文庫）など。

すわ・はるお＝一九三四年生まる。東京大学大学院修了。現在学習院女子短期大学教授。主要著書は『元禄歌舞伎の研究』（笠間書院）『近松世話浄瑠璃の研究』（笠間書院）『歌舞伎史の画証的研究』（飛鳥書房）など。

司会者の諒解により検印を省略します 517

シンポジウム日本文学 7

近　松

昭和51年7月20日　初刷印刷
昭和51年7月25日　初刷発行

司会者　松崎　仁

発行者　鶴岡阪巳

発行所　株式会社　學生社

東京都千代田区九段南2-2-4（郵便番号102）
電話 03(263)2611(代)振替・東京1-18870番
編集担当 堀　健二郎

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

# 近松

出席者
松崎仁（司会）
広末保　原道生
土田衛
信多純一
服部春雄

「シンポジウム」日本文学 7

学生社

出席者

松崎仁〈司会〉

広末保

原道生

土田衛

信多純一

諏訪春雄

装幀

杉浦康平＋鈴木一誌

〔シンポジウム〕日本文学——近松・目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はじめに　松崎　仁

第一章　中世芸能と近松　《報告》原　道生

中世芸能への関心……一四
呪術宗教的な芸能伝承と近松……二一
伝承の逆転……二七
劇的構造とのかかわり……四〇
観客の期待するもの……四四
劇的状況の転換……四八
大状況と小状況の二重構造……五四
浄瑠璃史的観点の重要性……六一
構想と趣向の意義を探る……六九
語り手の変質……七三
呪術的なものの新しいイメージ……八三

第二章　近松浄瑠璃における歌舞伎劇の役割　《報告》土田　衞

従来の研究の問題点……八九

作劇法の比較……九四
表現の相違・演技と音曲と……一〇三
歌舞伎のせりふ・浄瑠璃の会話……一〇八
趣向の単位……一一三
お初観音めぐり論……一一七
解決を要する諸問題……一二四

## 第三章　人形劇としての近松浄瑠璃

《報告》　信　多　純　一

演出についての研究史……一三五
からくり……一四三
首と性根……一四九
人形の舞台……一五五
興行様式……一六三
音曲としてのとらえ方……一七三
詞章に表われない演技……一八二
浄瑠璃の対話劇的性格……一九〇

## 第四章　近松の時代浄瑠璃への新しいアプローチ

《報告》　諏訪春雄


時代浄瑠璃の研究分野……一九九
これまでの代表的研究……二〇七
これまでの研究の問題点……二一五
時代と世話の概念……二二〇
時代・世話区分のメルクマール……二二六
ショー的要素をめぐって……二三五
ショー的な場面とその詞章……二四〇
時代浄瑠璃の構成と太夫の増加……二四七
時代浄瑠璃の構成の変化要因……二五六
作者と語り手との緊張関係……二六三

あとがき……二六九
事項索引……二七一

近

松

# はじめに

**松崎** 今度の近松についてのシンポジウムの計画で、とくに中心の話題、あるいは主題にしたいと思ったのは、近松の時代物をどう考えるかということだったのです。なぜそう考えたかというと、過去の研究史をこれからいろいろ振り返っていただくことになりますけれども、どうも世話物に明治以後の関心がより多く集中している。それは確かに世話物はいろんな意味で研究しやすい、また近代人が関心を寄せやすいという条件があったのは事実です。時代物はそれに反してあまりにも複雑な様相を呈しているために、アプローチのしにくい分野であったという事情があります。たとえば、研究者の関心が三段目悲劇に集中していく時期があったと思うんですが、しかしそれだけでは豊富で多様な時代物の持っている内容が見落とされる。それから段構成の統一が非常に論じられた。しかし全曲、あるいは各段ごとの統一ということと時代物の本質ということとはどれだけ本質的な関連があるか、時代物はもっと部分の豊かさというのが問題になるんじゃないかという疑問もある。そういうわけで、一つの角度からのアプローチは幾

◀近松の肖像
（『難波土産』より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つもあったけれども、それを多角的に見る研究方法はなかなかつかめなかったと思うんです。ここではどこまでそれを見いだせるかが、私たちの努力目標になるかと思います。

そのためにまず三つの柱を立ててみました。その一つは原さんにお願いする「中世芸能と近松」、これは近松が中世芸能を継承しながらそれをどう展開しているかという問題へのアプローチの方法をさぐろうとするものです。これを取り上げたのは、一つは最近数年間に、たとえば広末さんや今尾さんというような方々の新しい視角、視点が出てきたということ、[1]あるいは原さんの『大職冠』研究、[2]あるいは室木さんの説経の研究[3]とか、そういう中世以来の芸能思想や、中世語り物の研究も進んできたところで、一つの柱を立てたわけです。そのつぎは歌舞伎との関係、「歌舞伎と近松」を土田さんに報告いただいて考えるわけですが、それと第三章の信多さんにお願いする「人形芝居としての演出」の問題、これはいずれも近松を、読む作品という観点からじゃなくて、演じられる舞台芸能として捉えていく観点を充実したかったから立てた柱です。ほかならぬ人形浄瑠璃、人形芝居としての演出、これには近年祐田善雄さんが進めていらっしゃった音曲研究、[4]それから信多さんが前からやっていらっしゃる人形の問題、[5]さらに角田一郎さんがやって来られた舞台上の演出の問題[6]――それだけじゃありませんが――そういった研究の進展が踏まえられるであろうという期待を持っております。そして最後に、時代浄瑠璃に対して、もっか諏訪さんご自身どういうアプローチの方法を考えていらっしゃるのかという、方法上の可能性を探っていただきたいと思っておりますけれども、一章から三章までの討論を吸収しながら諏訪さんのご意見を出していただいて、そしてそれを討論するというふうにできたらよいと思うんです。

しかしここで注意しなければならないのは、時代物を考えるためには世話物を考えなければいけないし、世話物を考えるには時代物を考えなければならないという関係があることです。ご承

(1)広末保『もう一つの日本美』(昭40・11、美術出版社)、「死の禁忌の舞台化」(文学、昭46・5。後に『辺界の悪所』平凡社所収)。今尾哲也「注釈の原点」(文学、昭45・4)。
(2)原道生「大職冠ノートー近松以前ー」(近松論集6)。
(3)室木弥太郎『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』(昭45・12、風間書房)。
(4)日本古典文学大系『文楽浄瑠璃集』(昭40・4)。「音曲の文体からみた近松」(解釈と鑑賞、昭45・10)、「近松の音楽と構成」(国文学、昭46・9)等(『浄瑠璃史論考』昭50・8、中央公論社所収)。
(5)信多純一「近松世話浄瑠璃における口上と手妻について」(芸能史研究、昭41・7)、「道化人形の足跡」(日本美術工芸、昭45・9)、『のろまそろま狂言集成』(昭49・11、大学堂書店)等。
(6)角田一郎『人形劇の成立に関する研究』(昭38・8、旭

知のように時代浄瑠璃という観念は、世話浄瑠璃が生まれてからできたわけです。そういうことで、中心の主題として時代物と申しましたが、つねに世話物をも視野に収めて、時代と世話を考えていかなければならないだろうと思います。それは随時、討論の中で深めていっていただきたい、こんなふうに思うわけです。

そこでまず最初に、原さんに「中世芸能と近松」という題で報告していただくことにします。

＊ 挿図は、斉藤多美子氏、天理図書館、大洲市立図書館、慶応義塾図書館、演劇博物館、大阪大学図書館、東京大学図書館のご好意により掲載できました。お礼を申しあげます。

屋書店)、「人形舞台の変遷」(解釈と鑑賞、昭45・10)、「人形浄瑠璃の付舞台について」(竜谷大学論集、昭46・2)等。

# 第一章　中世芸能と近松

《報告》　原　道生

あらかじめ設定された章題は「近松における中世的なもの」となっていたが、これでは少々概括的に過ぎるし、それに、近松の中から殊更に「中世」を探り出すという試みそのものが当面さして重要なこととも思われない。従って、ここでは、それを、「近松の時代浄瑠璃が中世芸能、特にその根幹をなしていたはずの語り物の流れをどのように承けているか」という視点から考えて見ることにした。もっともその場合、「芸能」とはいいながらも、かなり文学論的、素材論的にかたよった角度からのアプローチになるという危惧がないわけではない。けれども、その点は、自分自身の平生の関心がそうであることに加えて、更に今回は、他に土田・信多両氏による音曲・人形・演技・舞台等々に関してのレポートが用意されているという事情も考慮すれば、むしろある程度意識的にそうするくらいの方が却って問題点を明確にし易いことになるのではないかとも考える。右の次第を御諒承の上、御討議いただければ幸いである。

初期の浄瑠璃が、中世の語り物のレパートリーを殆どそのままに受け継いで、それに「浄瑠璃節」をつけて語るといった性格のものだったということは、既に室木氏などの研究によって周知の通りである。そしてその後、次第に浄瑠璃独自の脚色が施されるようになり、前代の借り物ではない作品が作られ始めるという事態へと至ったものだろう。従って浄瑠璃の作品一々につき、その源泉となった中世語り物との差異を検討して行くということは（少なくとも近松の作品迄は）、個々の作品・作者の独自性を計る上で一つの有効な尺度たり得るものと思われる。

（ごく大雑把にいって、この見方からすれば、浄瑠璃史上、最初の大きな飛躍は、金平物の創始によって中世語り物の流れとは若干異質な一つの「世界」が新しく確立されたということであり、第二の飛躍は、近松の世話物によって、常に先行伝承に依拠していた「世界」の範囲が一気に同時代の現実社会に迄拡大されたということになるとは考えられないか。）

ところで、中世の語り物といってもその範囲は極めて広い。その代表的なものは、勿論平家物語であり、義経記・曽我物語である。そして、近松にあっても、これらを「世界」とする作品が群を抜いていることはいう迄もない。しかしながら、これらは、その原拠（平家等）の持つ巾が広過ぎるためもあってか、いわば「世界」の拘束性といったものが少々弱いようでもあり、又、それらを対象にした場合、ともすれば、その論点が拡散してしまうのではないかという気もしないではない。そこで、今回は、更にその点の限定がし易いものとして、舞曲の流れを承けて成立した次の諸作あたりをまずとり上げてみることにした。

1　出世景清　（景清〔舞〕、大仏供養・景清〔謡〕→古浄瑠璃→近松）
2　鎌田兵衛名所盃　（舞曲・謡曲→説経→近松）　cf　菅原親王〔古浄瑠璃〕
3　百合若大臣野守鏡　（舞曲・謡曲→説経→近松）
4　大職冠　（入鹿・大職冠〔舞〕、海士〔謡〕→古浄瑠璃→近松）
5　嫗山姥三段目　（満仲〔舞〕、仲光〔謡〕→多田満仲・公平法問諍・忠臣身替物語〔古浄瑠璃〕→近松）

歌舞伎については総て省略した。

これらは、その間に古浄瑠璃・歌舞伎などを介在させてはいても、平家等の場合に比べれば、原拠となる中世語り物との直接的な繋がりは強く、それだけに両者間の差異も見易いものといえるだろう。そして又、これらの原拠となる舞曲（謡曲）の背後には、更に固有の唱導・縁起が存在していたこと（室木・向井・原論文等）を考えれば、ある意味では、これらが時代浄瑠璃（つまりは浄瑠璃）の最も正統的（価値評価とは別に）な流れとして位置づけられるものであり、これらをいわば最右翼として、その左に新しく金平や世話物の大きな拡がりが連なって行くという見取図が引けて来るのではなかろうか。出来得れば、右の諸作の検討を手がかりに、問題を近松全般に及ぼして行きたいと考える所以である。

細かな指摘の一々は報告の折に譲りたいが、これら諸作を見て行くと、全体的な印象として近松の場合、その原拠となる舞曲をかなり忠実に踏まえているということはいえるだろう（もっとも、それぞれに見て行けば、例えば『名所盃』ではむしろ逆にそれを壊そうとしているという傾向があるようにさまざまな相違もあるのだが）。ただし、その際、『大職冠』の玉取りが、舞曲・謡曲に於ける、真実の玉を入手するために海女の死を余儀なくさせられたという設定を、実は存在しない玉をあると見せかけるためのものとしてのみ海女の死が必要だったというように、いわば本末顚倒させた形へと反転させたものであるという事態に最も顕著に見られる通り、その原拠の「踏まえ方」の特色は、非常に丹念な「逆転」という方法をとることによって全く新しい局面の創造を図っているという点

にあるように思われる。（他にも、『出世景清』では、舞曲の「殺す父は殺さずして助くる母が殺すぞ」として父が二人の子を殺すという場面が、「殺す母は殺さいで助くる父御に殺さるゝぞ」という母による子殺しへと変えられ、『名所盃』に於ける鎌田の最期が、妻の裏切りと誤解して「七の子はなすとも女に心許すな」と述懐しつつ息を引取る舞曲とは全く逆に、妻の誠を知って「七の子は……心許すなと云伝へしも偽ぞや」と述べるものとなっており、更に、母にはそれと明かさずに従容として死に赴く幸寿丸〈満仲〉に対して、わざと未練に振舞って母の手にかかろうとする冠者丸〈嬢山姥〉といった工合である。）近松に於ける中世語り物との連続、及びそこで果された飛躍、変質という問題を考えて行くための糸口の一つは、この極めて意識的になされている「逆転」の意味を探って行くことにあるだろう。

以下のレポートは、おおよそ右のような観点に立って、これら諸作の分析を整理しながら主要な問題点をあげて行き、それを討論の素材としていただくといった進め方をとることにしたい。そこでは、既に『出世景清』についての広末氏の指摘にもあるような、より深刻な劇的状況の設定、それに対処する特異な人物像の造型などの問題を始めとして、劇中に於ける死の意味づけ、主人公の救済その他の点にわたり、近松が新しく創り出して来ているものが何であったかを見て行くことになるだろう。そして更に、そうした「悲劇」的な要因についてばかりではなく、作文上の特色や芸能としての山場の設定等々に関しても両者の比較を通して近松の独自性を考えることが出来ればと思っている。

## 中世芸能への関心

**原**　ここ数年、とくに中世末から近世初めにかけての芸能史といいますか、演劇史の研究はずいぶん変わってきているという印象を持つんですが、それを具体的な論文とか著書について振り返ってみるところから始めたいと思います。

はっきりそういう変化がわれわれの前にわかるようになったのがいつかというと、どうも昭和

(1)小笠原恭子「中・近世（演劇）」（文学・語学59、昭46・3）。昭和四十五年度の学界展望。

(2)今尾哲也『変身の思想——日本演劇における演技の論理——（叢書・日本文学史研究）』（昭45・6、法政大学出版局）。歌舞伎を役者という

四十五年という年が一つの重要な意味を持った年のように思われます。そのことは既に小笠原恭子さんが指摘しておられることでもあるんですが、[1]その年に出されてきた主だった業績を挙げて行きますと、単行本では六月に今尾哲也さんの『変身の思想』[2]が出ています。それからやっぱり六月に広末さんの『悪場所の発想』[3]、それから十一月に服部幸雄さんの『歌舞伎の構造』[4]が出て、十二月に室木弥太郎さんの『語り物の研究』[5]。又、雑誌論文で言いますと――いろんな方がいろいろ言っておられるんですが――わりあい多くの目に触れてみんなに刺激を与えたように考えられるものとしては、『文学』で二月号に郡司正勝さんの「芸能の発想と文学」、サブタイトルは「江戸芸術の基底にあるもの」[6]という論文、それから四月号に今尾哲也さんの「注釈の原点」サブタイトルは、「曽根崎心中の場合」[7]、こうしたものが一度に出てきた年です。

もちろんこうした研究は何もこの年にいきなりされ始めたというわけじゃなくて、単行本の中にはかなり前に一度発表された論文を再録したという性格のものもありますけれども、ともかくそこで気づきますことは「制外者に担われた芸能の世界というものをどう把握するか」というところにそれぞれの方の視点が集中しているのではないかという点です。つまり、そこでは共通して、それまでの演劇史研究の方法によってはどうも捉えきれないという感じのあった非合理の領域へも、進んで踏み込んでいこうとする問題意識が鮮明に出ているというように思われます。それがいちどきにこの年に出てきた。ちょうどそれは世間一般にも近代合理主義への反省ということが強く言われていた状況とも見合っているんでしょうが、僕にとっては非常に印象的な感じがしました。そして、それ以後、芸能史研究といった場合、多かれ少なかれ、いまお話しましたようないろんな業績で喚起された、担い手である芸能民というもののあり方とか精神を視野に入れて考えていく、これはほとんど常識とされてきているという感じがいたします。ただもちろん、自律的な創造主体に支えられた演劇と規定し、その演技の検討を通し歌舞伎固有の思想性を追究しようと試みたもの。

(3)広末保『悪場所の発想――伝承の創造的回復――(三省堂ブックス)』(昭45・6、三省堂、改編『遊行・悪場所』未来社)。中世の遊行漂泊や近世の悪場所の持つ意味を探ることによって、前近代の民衆の発想を捉えようとしたもの。

(4)服部幸雄『歌舞伎の構造――伝統演劇の創造精神――(中公新書)』(昭45・11、中央公論社)。歌舞伎を支えて来た前近代的な構造とその創造精神を「芸」「狂言」などの具体的分析を通して探ろうとしたもの。

(5)室木弥太郎『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』(昭45・12、風間書房)。中世から近世への転換期における語り物につき、その芸能者のあり方、作品の発展などの問題を実証的に考察したもの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com